

平成13年度「購入資料—中国陶磁器—」紹介

高橋 隆博

博物館の資料購入費はごく少ない。しかし、まことに貴重な予算を預かっているわけで、購入資料の選定には腐心している。資料収集の根幹は、博物館の将来構想に鑑みることとはもとより、学生の研究と教育にいかにより有効的に機能させるか、つきつめればこの2点に収斂されよう。従って、資料（作品）の「レベル」を見極める眼力を養うためにも、館員はいささかの懈怠も許されない。博物館は、資料研究を精力的にすすめ、情報収集にも細心の注意をはらい、地道な研鑽を積み重ねている。

平成13年度は、4点の中国陶磁器を購入した。これまで中国・漢代の緑釉陶器、唐代の白釉陶器など中国陶磁器を数点購入しており、将来的

には収集品による「中国陶磁器展」をも企画したいと構想している。今回の購入は、そうした基本計画に基づいている。

1、青磁大皿（明代初期）

青磁の色調は、釉薬の中に含まれる微量の酸化第二鉄が焼成中に還元されて酸化第一鉄となって発色する。青磁器は、東洋わけても中国と朝鮮半島を代表するやきものである。技法的には灰釉に淵源し、春秋時代（BC 6～BC 5世紀）に遡るが、本格的な焼成は後漢以降の越州窯（江南地方）である。そして、晩唐から五代にかけての余姚窯（浙江省）は中国随一の名窯といわれ、余姚窯の青磁器は「秘色青磁」の名で貴ば



青磁大皿



五彩花鳥「魁」字文鉢



れた。宋代に入ると、龍泉窯（浙江省龍泉県一帯）が主流となり、南宋代には質の高い青磁（日本では砧青磁という）を製して、中国第一の青磁窯の名をほしいままにし、次いで元・明時代には濃い黄緑色を発色する青磁器を生み出した（砧青磁に比べて淡黄色をおびる）。

朝鮮半島では、高麗時代に宋代青磁の影響を受け、名状しがたい翡色の釉肌が絶対の魅力となっている青磁器がつくられ、それは東洋陶磁史に燦然と輝き確固たる地位を得ている。その美質は、本家中国の宋・元の青磁に比肩するほど高雅であり、「翡色青磁」の名で称賛を集めた。また、生地に白土を埋め込んで文様をあらわす象嵌青磁は、高麗が生んだまったく独創的な技法である。

この青磁大皿は、濃い黄緑色の色調といい、全体の細かな陰刻文といい、いずれも龍泉窯青磁器の特徴をよくあらわしている。こうした青磁を、日本では天竜寺青磁と呼んでいる。この

名称は、足利尊氏が天竜寺を造営する資金を得るために元に派遣した幕府公許の貿易船が舶載したことから、また素彦禅師が中国から持ち帰った天竜寺に伝わる青磁浮牡丹香炉にちなんで命名されたとの伝承があるが明確ではない。

2、五彩花鳥「魁」字文鉢（明代後期）

たっぷりとした大型の鉢で、見込みに「魁」の文字を記すところから、世に「魁手」の鉢と呼ばれている。胴部には、黒釉の線描きと赤、緑釉を用いて蓮池水禽文をあらわし、胴の上縁部に窓わくをつくり、そこに双魚や双鳥、双兔文を描いている。見込みには「魁」字を記し、その周囲に藻魚文を配している。典型的な明時代の「魁」手鉢の優品である。五彩（呉須赤絵）の大皿や鉢は日本に数多くもたらされたが、この種の鉢は茶席では菓子鉢として用いられ、とりわけ珍重された。

赤や緑、黒色などの濃厚鮮明な顔料をつかっ



青花白磁花文鉢



青花白磁花鳥文大皿



て文様をあらわす色絵を五彩というが、日本では茶人たちによって呉須赤絵と言いつけられてきた。呉須とは、染付けの顔料であるコバルトの意味のことだが、なにゆえにコバルトを使っていない色絵を呉須赤絵と称したのか、その理由はわからない。

欧米ではスワトウ・ウェア（汕頭磁器）と呼んでいる。これは、呉須赤絵が広東省汕頭港から積み出されたとの俗説から生まれた呼称だが、明末・清初のオランダへの輸出港は厦門（アモイ）近傍の石碼（シイマ）の外港にあたる福建省漳州であり、欧米における呼称のよりどころも不明である。しかしながら、積み出し港は生産地を裏づけてくれる。呉須赤絵の焼成地はなお明らかではないものの、官窯である景德鎮窯（江西省）以外の、少なくとも現在の福建省南部から広東省東部にかけての民窯において、明代後期の万暦年間から明代末に焼成されたことは疑いない。

日本への請来時期だが、一つは嘉靖（1522～1566）末期以来、広東省の澳門（マカオ）を前線基地としたポルトガルを通じて、二つは朱印船貿易の舶載品として、三つ目は17世紀初頭から陶磁器を中国から直接購入しはじめるオランダ東印度会社を経由して日本にもたらされた。

3、青花白磁花文鉢（明代後期）

見込みに真上から鑑賞した花文を、内側の周縁部には山水樓閣図を描く。胴部には、見込みと同じ花文を四つあらし、その間に立蓮華文を配している。文様はすべて呉須（染付）で描かれている。また、口縁部は白い釉薬が剥落し素地が露出している。これを、いわゆる「虫喰い」という。やや濁った白の釉薬といい、文様といい、そして虫喰いといい、わが国でいうところの古染付の典型的な作品といえる。

青花は、中国では青花白磁にあたり、青い顔料のコバルト（呉須）で花文様を絵付けしたというほどの意であり、日本では染付と呼ぶ。明代末期から清代初期にかけての動乱期に、景德

鎮の民窯でつくられた青花白磁のことを、わが国では南京染付と総称した。この名称は、「中国染付」「南京渡来の染付」の意で、南京豪商の商う生糸とともに舶載された染付白磁のことである。とりわけ、明代最末期の天啓年間（1621～27）に、日本からの注文でつくられた茶道具や飲食器をとくに古染付と呼び、茶人たちに珍重されてきた。この古染付の鉢も茶席の菓子鉢として使われたものであろう。

隆慶五年（1571）、膨大な数量の御器の焼造が命ぜられたことや万暦年間の大量生産が災いし、景德鎮周辺の胎土は枯渇に瀕した。ために胎土（硅石質長石と粘土質カオリンをあわせる）の質が粗悪となり、焼成中に生地と釉薬との収縮率の違いから、薄くかかる口縁部の釉薬が生地から剥離し、そこに小さな気孔ができ、焼成後に釉薬の層が破れるのである。いわば粗器なのだが、日本ではこれを「味わい」とみなし、茶人や文人がことのほか賞翫してきた。

4、青花白磁花鳥文大皿（明代後期）

皿の中央に蓮池水禽文をおき、周縁部を八つに区画割りして、それぞれに稜花形文を描き、さらにその中に花文をあらわしている。花文はチューリップを便化したもので、こうした意匠の青花白磁を「芙蓉手」という。

芙蓉手の青花白磁は、同じ時期に、華南つまり呉須手や呉須赤絵を製した広東や福建の民窯ではなく、景德鎮の民窯で焼成された。もともとは、ヨーロッパの注文による陶磁器であって、そのために西欧趣味のデザインとなっている。チューリップ様の花文はこのことを如実に示してくれる。

芙蓉手の作例中には万暦年製の銘があり、その頃から製されたものといえる。おもにオランダの東印度会社によって西欧に輸出された。江戸時代、日本にも大量にもたらされ、それが有田で模倣され、ヨーロッパに大量に輸出されていることは興味深い。